

春を待つカメムシたち

クサギカメムシ *Halyomorpha halys*
カメムシ科 カメムシ目

最も一般的なカメムシです。和名は、植物のクサギでよく見られることに由来します。成虫越冬で、岩や樹皮の隙間で冬を越します。人家に入り込んで「ワーッ!」「キャーッ!」と騒がれるのは、たいていコイツ。



クサギカメムシ

アカスジキンカメムシ *Poecilocoris lewisi*
キンカメムシ科 カメムシ目

終齢幼虫で、落ち葉の裏にしがみついで越冬します。季節ごとに多様な植物の汁を吸い、秋にはコブシやモクレンなどの果実でよく見られます。幼虫は白黒ですが、初夏には、緑色の金属光沢の地に、鮮やかな赤色の線状の紋が走る、美しい成虫になります。60円切手にも描かれているので知っている人も多いはず。標本にすると、金属光沢が失われるが残念。(逸見)



マルカメムシ

マルカメムシ *Megacocta punctatissima*
マルカメムシ科 カメムシ目

体長4mmほど。一見カメムシとは思えない姿をしています。マメ科の植物が好物で、クズが多く繁る環境に見られます。乾いて丸まった落ち葉の中、樹皮の割れ目などで越冬します。丸っこくて、可愛いけれど…匂いは強烈!



アカスジキンカメムシの幼虫(上)
成虫(下)

※ 2021年8月の豪雨により被災した建物の復旧工事ともなう臨時休館のため、12~2月のイベントはありません。

こんちゅう館 News 新シリーズ Vol.7 秋号 2021年12月1日

編集/発行 広島市森林公園 こんちゅう館

〒732-0036 広島市東区福田町字藤ヶ丸 10173 番地

TEL (082)899-8964 FAX (082)899-8233 HP <http://www.hiro-kon.jp/>

こんちゅう館 News

み～んな主役!! 虫の館のスターたち ①

タガメ *Kirkaldyia deyrolli*

コオイムシ科 カメムシ目



雌成虫

孵化

1 齢幼虫

成虫の体長は、雌 62 mm、雄 55 mm前後で日本最大の水生昆虫。獲物を捕らえる強大な前脚をかまえた姿は各種メディアでおなじみです。

タガメは、初夏～夏に繁殖を行います。この時期が飼育に一番手間がかかります。まず雌雄をペアリングする際、雄が体の大きな雌に食べられないよう事前に十分餌を与えます。無事産卵・孵化したら、羽化までの約40日間、数日おきに幼虫の餌をこんちゅう館「トンボ池」で確保します。1回の餌やりでオタマジャクシ等の小動物が30~50個体くらい必要です。飼育ケースの水は、餌の死骸とタガメの排泄物ですぐ汚れるので、餌やりのたびに交換します。今までは、共食いを恐れて幼虫時代後半は個体飼育していましたが、大きなケースに水草を多目に入れ、餌を十分与えたところ、15個体前後の集団飼育で10頭前後羽化させることができました。ただし餌不足だと共食いが多発し、1ケース中、羽化個体は1頭のみということもあります。(松尾)

パピオンドームの舞姫 ①

スジグロカバマダラ *Danaus genutia*

タテハチョウ科 チョウ目



卵

幼虫

蛹(左:桃色型 右:緑色型)

ランタナの花で吸蜜する雄

スジグロカバマダラは、八重山諸島に分布するマダラチョウの仲間です。生息地では普通に見られますが、実は…幼虫が死にやすい「累代飼育困難チョウ」なのです。

食草は、キョウチクトウ科のリュウキュウガシワです。この植物には、アブラムシやカイガラムシなどがつきやすく、葉が変形・落葉しがちです。そのため、強い水流を当て、害虫を吹き飛ばす作業が欠かせません。雌は鉢仕立てのリュウキュウガシワの葉裏に卵をよく産んでくれます。ところが、集団飼育した場合、幼虫の生存率がとても不安定なのです。多くの蛹を得ることもありますが、ほとんどが死んでしまう場合もあります。原因の特定には至っていませんが、幼虫集団の個体数調整や、飼育時の温度調整など、飼育条件を変えながら、生存率の向上を目指しています。

試行錯誤の結果、最近では一ヶ月間に 30 個体程度は成虫まで育て上げることができるようになりました。来館した折は、ぜひとも注目してみてください。(佐藤)

トンボ池の四季 2021 冬

木枯らしが吹く時期、生き物の活動が見られないトンボ池は、どこか物悲しい雰囲気になります。それでも、よ〜く目を凝らして観察すると、春を待つ昆虫たちの姿を見つけることができます。

水際にある枯れた草の茎を見ると、小さな穴が一行に並んでいます。これは晩秋にアオイトトンボの雌が卵を産み込んだ痕跡です。卵は植物体のなかで冬を越し、春暖かくなると孵化した幼虫はそこから這い出て、水中に入ります。トンボ池で最も大きな捕食者、クロスジギンヤンマのヤゴやミズカマキリも、水中でじっと息をひそめています。凍るほど冷たい水中では動きは鈍く、手づかみで簡単に採れるほどです。

生き物が息をひそめているこの時期、冬ならではの整備を行います。中でも、ラクウショウの落ち葉の除去は、大切ですが労力を必要とする大仕事です。枯れ葉には油分が多く含まれているため、水底に堆積した落ち葉は分解されにくいのです。徐々に池を埋めてしまうため、適度に取り除かなければなりません。風は冷たく、水を吸った落ち葉は重いですが、春に観察できる様々な生物の姿を思い描きながら作業を行います。(逸見)



クロスジギンヤンマの終齢幼虫



水面が凍ったトンボ池



カンガレイに産卵するアオイトトンボ(左) 産卵痕(右)



水中のミズカマキリ